
三二物語 ~ Guardian-Spirit ~

凧夜 流歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミニ物語〜Guardian-Spirit〜

【Nコード】

N1502Q

【作者名】

風夜 流歌

【あらすじ】

『魔法の国シヨウシノコウのスズナリ町。』

ここは、国唯一の幽霊と共存する町。

ここでは必ず5つの事をまず覚えなくてはいけない。

- 大人の歳とされている16歳になると一人一体の幽霊を守護霊としてそばにおくこと。

- 守護霊となる幽霊は16の誕生日の日に現れる。

- 守護霊になる霊は高等霊、人に触れたり憑いた人を守るため、攻撃や防御の魔法が使える。

●この幽霊たちはこの町で亡くなった市民で、選ばれた幽霊だけが守護霊として人に憑ける。

●守護霊の役目は憑いている人を守ることであり、守護する人間が亡くなりしだい霊界に帰る事が出来る。

これが私、東雲 歌が小さい頃から教えられてきた、守護霊の話。☞
守護霊と歌。これからこの町で何が起こる・・・？

第一章 守護する者 第一話

魔法の国シヨウシノコウのスズナリ町。

ここは、国唯一の幽霊と共存する町。

ここでは必ず5つの事をまず覚えなくてはいけない。

- 大人の歳とされている16歳になると一人一体の幽霊を守護霊としてそばにおくこと。

- 守護霊となる幽霊は16の誕生日の日に現れる。

- 守護霊になる霊は高等霊、人に触れたり憑いた人を守るため、攻撃や防御の魔法が使える。

- この幽霊たちはこの町で亡くなった市民で、選ばれた幽霊だけが守護霊として人に憑ける。

- 守護霊の役目は憑いている人を守ることであり、守護する人間が亡くなりしだい霊界に帰る事が出来る。

これが私、東雲 歌が小さい頃から教えられてきた、守護霊の話。その話をしてくれたおばあちゃんにも両親にも町の大人にも、話の通り幽霊が憑いていた。

大抵の場合、守護霊に憑くのは同性同士の霊だが、ようは波長が合うか合わないかなので少数ながらに異性の守護霊が憑くことがある。つまり何が言いたいかっていうと、一週間前の私の誕生日に来たのは異性の、男の霊だったということだ。

「歌。起きて。早くしないと学校に遅れる」

無愛想な声に歌は目を覚ました。

目の前は、呆れた顔で椅子に座っている自分の守護霊がいる。

朝起こすのは普通親の仕事なのだろうが、あいにく歌の両親は11

歳の時に不運な事故で亡くなってしまった。

これは、一人一人に守護霊が憑くこの町ではすごく珍しい亡くなりかただと当時は大いに騒がれたものだ。

ベッドからはい出た歌は目を擦りながら時計を見る。

8時1分。

「・・・・・・」

一瞬、時間が止まった。

「あああああああ！！！！？？？」

時間の動き出した歌の発した大声に、守護霊は耳に指を入れ、うるいとアピールしている。

「遅刻するじゃないっ！！ユウ！なんでもっと早く起こしてくれなかったのよ！！」

「起こしたよ、失礼な。しかも7時からずっとだ。それでも起きなかったのは君の責任だ」

八つ当たり気味の歌の問い掛けにユウからグチグチと返事が返ってくる。忙しい、という名目で極力ユウの正論を聞かないようにして歌は急いで身支度を整えた。

「・・・・朝飯どうするんだよ。ちゃんと食わないと体に毒だぞ」

「そんな時間ないわよ！ほら、早く行くわよ！」

「・・・・相変わらず短気だな。もう少し糖分を摂取するべきだ」

うんうん、と一人頷くユウをほって歌は玄関を飛び出した。

第一章 守護する者 第一話（後書き）

『ユウ』というキャラが書きたいがためにこの小説を書いてしまった。

この後どう転ぶか、僕にもわかりません
どうか温かい目で見てやってください。

第二話

「ま、間に合ったあ」

予鈴のベルが鳴り響く校舎の1 - B組の教室に入り、歌はため息をもらす。

「君はもう少し運動をして体力をつけるべきだな」

飄々と言つてのけるのは外ならぬユウだ。

そっちは息ひとつ乱れてない。一緒に走ってきたのに……。このひよる長い体のどこにそんな体力が……。

え？幽霊のくせに疲れたりするのかつて？

それが、ユウの証言によると『幽霊』というカテゴリーに入っているだけで基本は人間と同じなんだそうだ。

体力や身体能力などは生前と一緒に歌は死ぬ前に身体能力を上げといた方が良く言われる。

ちなみに歌の守護霊の名前は、もうわかってるだろうがユウだ。

本名を教える必要性はないからと、生前呼ばれていたあだ名しか教えてくれなかった。

髪はサラサラの白っぽいクリーム色。瞳の色は綺麗なスカイブルーだ。しかも顔が整っていてカッコイイというのが少しむかつく。

そして意外なことに生前は守護霊の研究者チームの一人だったらしい。

今ですら人数が6人しかいないエリートだらけのトップチームだ。

頭が良いのは必須なのはわかるが、なぜ運動神経まで良いのかわからない。

研究者だからだろうか、いつもカッターシャツに白衣という格好をしている。

死因は、何度聞いても教えてくれなかった。

いつも歌と同じくらいの歳、つまり16歳の姿になっているのでホントかどうかはわからないが、亡くなったのは23歳の誕生日の二

日後だつたらしい。

本来の歳の身長は178。と言つてもいつもの16の姿でも175であり変わらない。体重は教えてくれなかったが、ひよる長いことから大体想像が出来る。ちなみに歌は160cmだ。

「・・・歌。早く席につけ。ドアの前で突つ立つてたら通行の邪魔になる。ただえさえ君は大きくて邪魔になりやすいんだから」

「失礼ね！」

ユウが真面目な顔で言つたそれは、普通女の子に言う台詞ではない。こいつにはデリカシーというものは備わっていないのだろうか。

大体私は体重も横幅も標準以下で痩せている方よ！

イライラと席についた歌の所に同じクラスの友達、神崎 詩音がやって来た。

この子は誕生日が先なため、守護霊はまだいない。

のほほんとした雰囲気の子で笑うととてもかわいらしい。

「おはよう歌、ユウさん」

いつものようにニコツと笑いかけてくれた。

なんだかこの笑顔を見ていると、イライラしている自分がバカらしくなってくる。

「おはよう詩音」

「おはようございます。神崎さん」

歌の後に続いて、笑顔と共に礼儀正しくユウが挨拶をする。

お得意の猫かぶりだ。

歌に対してと、他多数の人に対しての接し方がまるで違う。

そのため、未恐ろしいほど学校での評判は上々だ。

そりゃあ、見た目も話し方も頭も運動神経も完璧、その上、元科学者で少し年上のお兄さんという感じなものだから女子の間ではファンクラブまで出来ているらしいし、そのくせ気取ってなく謙虚に振る舞い男子に対しても平等に接したお陰で、信頼もあつたりする。

1週間。たった1週間で学校の皆の信頼を得たということに、驚き

を乗り越して称賛したい気分になってくる。
すぐにクラスの人に囲まれて楽しそうに談笑しているユウを見て、
歌はため息をついたのだった。

第三話

陽も陰ってきたその日の放課後、歌は腕を伸ばしながらトボトボと歩いていた。

「疲れたあ・・・何で学校になんか行かなきゃいけないんだろ」

「勉強するためだろ」

歌のため息混じりの呟きに、どうでも良いようにユウが応える。

「勉強なら家でだって出来るでしょ」

「なら、対人関係を学ぶためだろ」

「友達なら中学校でもつくれるわ」

「社会勉強の意もあるんだろ」

あくまでもどうでも良いように、どうでも良いなら応えなければいいのにユウが律儀に応える。

歌は今日三度目のため息を付いた。

歌は夕飯が出来るまで宿題をやることになっている。

ユウは料理も上手い。

たまに守護霊つてなんだっけ？と思えてくるほど生きた人間とやることは同じだが、人間より数倍何でも出来る。

これはもちろんユウだけじゃなく他の守護霊もそうらしい。

こんなに完璧な人が沢山いるとは思えないけど・・・。ここまで出来ない人と人なんて護れないってユウが言っていたしなあ。

死んでから守護霊になるまでに特訓でもやるのかしら。

「・・・ユウ。今日多くない・・・？ナスが」

「そうか？いつも通りだろ」

今日の献立はナスの煮物にナスの肉詰め、ナスの味噌汁とナスの入った混ぜご飯。と、ナスのオンパレードだ。

「私がナス嫌いなもの知ってたの？」

「・・・さあな」

知ってたわね、これは。

ため息を付いたものの、決心したのか鼻をつまんで勢い良くナスを口にほおりこむ歌を眺めながら、ユウは静かに食べ進めていった。

涙目で箸を置いた歌はお茶を一気に飲み干した。

「なんだ歌、全部食べたのか。おかわりいるか？」

「・・・それ軽く虐めよユウ」

食器を片付け、椅子に座りなおした歌の前にユウが食後のデザートを置いた。

「プリンだ！どうしたの？これ」

「頑張つて食べてたからな。ご褒美だ」

「やっぱりナスが嫌いなもの知ってたんじゃない」

「なんだ？いらなのか」

「いる！」

ユウが取下げようとする手を平手打ちしてプリンを取り戻した歌は嬉々としてスプーンを手に取った。

ヒリヒリと痛む手をさすりながらユウは歌が美味しそうにプリンを食べる姿を見て苦笑した。

「おかわり、いるか？」

第三話（後書き）

なかなかユウのキャラが定まらない・・・。

第二章終わりの始まり 第一話

「・・・寒い」

10月の月末。元々町の位置が北寄りだから、寒くなるのが毎年早い。

今も、雪が降るのではないかと思えるくらいの雲が月明かりを遮って分厚く立ち込めている。

今から向かう家の、これから自分が受け持つ主人の誕生日があと一時間で終わろうとしている。

男は、暗くなつて人の少なくなった大通りを特に急ぐこともなく歩いていた。

「次の角を、右に・・・ここか？」

それはどこにでもあるような小さな一軒家。

窓からは暖かそうな明かりが漏れている。

ドアをノックすると中からまだ子供らしさを残す可愛い顔の女の子が出てきた。

「こんにちは東雲 歌さん。今日から君の守護をする者です」

歌は一瞬目を丸くしたが、すぐに笑顔になって部屋へ迎えてくれた。

「貴方が私の守護霊？・・・綺麗な顔してるけど・・・男、よね？」

「そう。男」

出されたお茶をずっと啜って男は応える。

「名前はなんて言うの？」

「・・・ああ、そうか。名乗らなければいけないんだっとな」

もう一度お茶を啜って男はため息混じりに続ける。

「そうだな・・・ユウと呼んでくれ。生前呼ばれていたあだ名だ」

「え、フルネームは？」

「君にフルネームを教える必要性は皆無に近い。呼び方さえわかれ

ばそれで良いだろう」

「・・・」

一瞬しんとした空気もユウのお茶の啜る音で簡単に破られる。歌は小さくため息をついて呟いた。

「・・・てつきり（優しそうな）女の人が来るかと思ってた」

それを聞いてか、少し眉をひそめたユウだが歌の呟きに律儀に応える。

「・・・まあ、大抵の場合は同性なんだが、守護霊は特性や波長が近いやつから選ばれるからな。稀に異性がつく事もあるんだよ」

「波長はわかるけど、特性って？」

「この町の人は魔法が使えるのは知っているな？」

コクツと頷く歌を確認し、ユウが続ける。

「守護霊もそれがつかえるんだ。主人を守らなきゃいけないからな。魔法には攻撃タイプと防御タイプの二種類があつて人によって特性がある。火、水、土、木、雷、風の六つだ」

「割と多いのね」

「まったくだ。ちなみに俺は攻撃タイプで水と風と雷の三つの魔法を得意にしている」

「複数使えるの？てつきり一つかと・・・。あ、特性が近いって事は私もその三つの特性を持つてるの？」

「いや、君は攻撃タイプで風と水。あと火の特性も伸びてきているとのデータが出ている。特性は通常二つか三つ持てるんだ、稀に四つ持っている奴もいるがな。守護霊は自分の主人を護る他に、持っている特性を引き伸ばし、使えるように指導するという家庭教師のような役目もある」

「指導って、あなた火の特性持っていないんでしょ？」

「使えないわけじゃない。得意ではないだけだ」

「ふん」

今度は歌が自分のお茶をずつつと啜る。

「・・・ユウさんは私の事はだいたい知ってるのよね？」

「ユウで良い。・・・まあ、ここに来る前に君に関しての資料は貰っている。護るにしても教えるにしても、何も知らないとうとうもないからな」

「じゃあさ、ユウの事も教えてよ。あんただけ私の事知ってるだなんて不公平でしょ？」

「・・・」

こんなに色々聞かれるとは思わなかった。

歳や身長ならともかく、死因を聞くのは人としてデリカシーがないのでは・・・？とユウはつくづく思う。

資料には性格までは書いていなかった。

見た目は黒く長い髪が印象的な大人しそうな子だと思っていたが、おてんばで活発そうな子供だ。

・・・なんでだろう、疲れてきた。

騒がしくなりそうな今後を思いユウはため息をついた

第二章終わりの始まり 第一話（後書き）

早々に第二章に入ってしまった。こりゃあ、終わるのは早いかな・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1502q/>

ミニ物語 ~ Guardian-Spirit ~

2011年10月6日14時15分発行